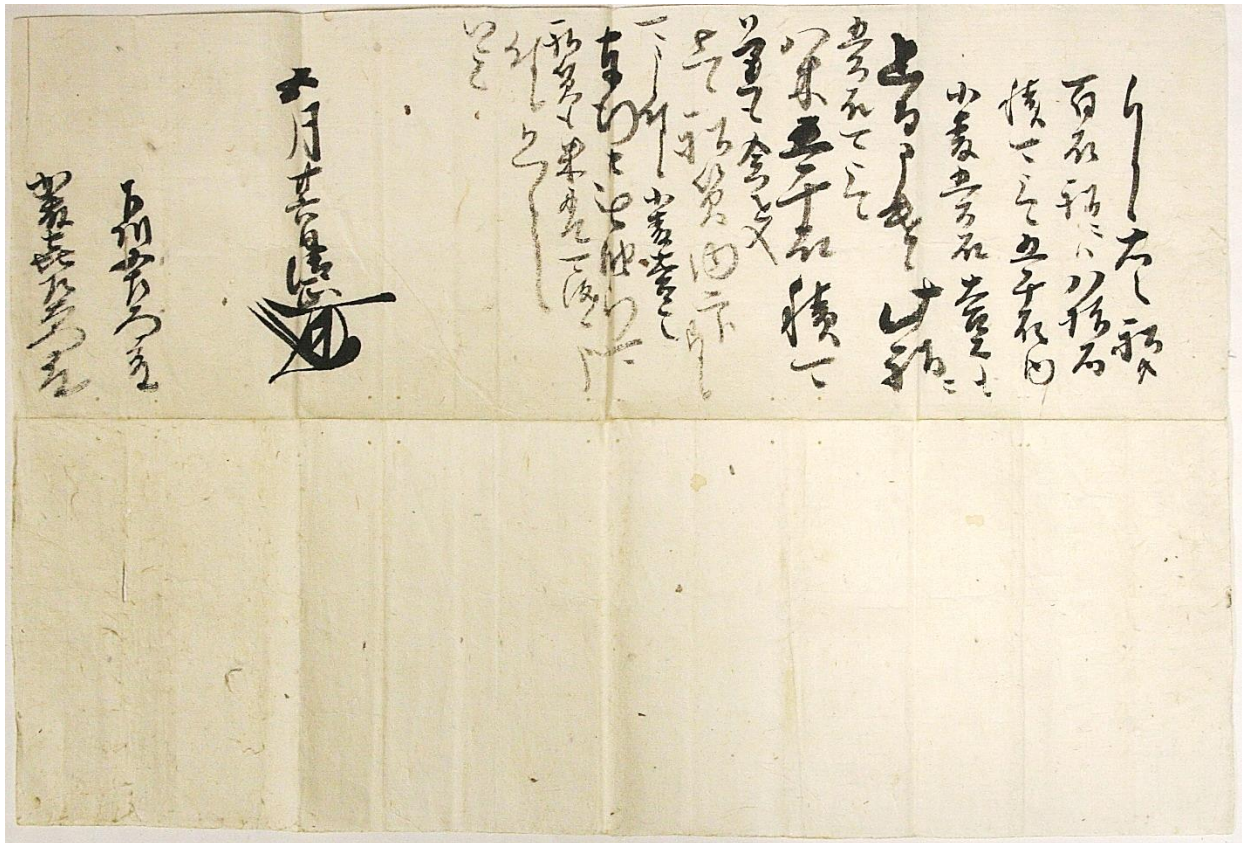


【19】〔加藤清正書状〕（年未詳）五月二十六日

（栗間良輔家文書 P〇〇一〇 No.三）



《釈文》

尚々右之船共

百石船二八拾石

積可レ上候、五千石内

小麦五百石・大豆も

追而申遣候、此船二

五百石可レ上候

八木五千石積可レ

いづれも念を入、

上候、船賃内二分致候、

可二申付一候、小麦・大豆之

奉行共無二油断二可二申

船賃も米にて可レ渡候、

付一候、恐々謹言、

以上

五月廿六日 清正（花押）

下川又左衛門尉殿

加藤喜左衛門尉殿

《読み下し文》

追つて申し遣し候、此の船に

八木（米）五千石積み

上ぐべく候、船賃内二分致し候、

奉行ども油断無く

申し付くべく候、恐々謹言

尚々右の船共

百石船には八拾石

積上ぐべく候、五千石内

小麦五百石・大豆も

五百石上ぐべく候、
いづれも念を入、
申し付くべく候、小麦・大豆の
船賃も米にて渡すべく候、以上

五月廿六日 清正（花押）

下川又左衛門尉殿
加藤喜左衛門尉殿

《用語》

【尚々】「なお（猶）」を強めた言い方。さらに。加えて。手紙の追って書きに用いる。

【百石船】船などに米一〇〇石、またはそれと同じ重量の荷物を積むこと。また、その能力。

【追つて】あまり間をおかないで。いずれすぐに。近いうちに。

【八木】（「米」の字を分解すれば、「八」「木」の二字となることから）米の異称。はちもく。

【奉行】武家時代の職名。公事（くじ）政務を担当し執行するもの。

【油断なく】注意をおこたることなく。ぬかりなく。

【清正】加藤清正（一五六二～一六一一年）。織豊・江戸時代前期の武将。

豊臣秀吉につかえ、賤ヶ岳（しずがたけ）の戦いに七本槍のひとりとして活躍。天正一六年肥後（熊本県）半国の領主となる。文禄・慶長の役で朝鮮に出兵、講和派の石田三成らと対立した。関ヶ原の戦いでは東軍に参加。戦後、肥後一国の領主となり、堅固な熊本城をきずいた。五〇歳で死去。尾張（愛知県）出身。通称は虎之助。

【下川又左衛門尉】下川元宣（？～一六二二年）。近江国佐々木氏の出身で、はじめ秀吉に仕えていたが、天正十五年（一五八七）頃から加藤清正に仕えた。熊本入国後は家老的地位にあり、特に朝鮮在陣中は筆頭家老として領内の政策全般の責任者であったという（森山恒雄「下川元宣」〈熊本日日新聞社編・刊『熊本県大百科事典』一九八二年〉）。また、「清正代侍略

記」（「大木記録文」『加藤清正伝』所収）には「七千石、熊本留守居・忠広代初家老、下川又左衛門」として記載され、「加藤清正侍帳」（『続群書類従』巻七一五本）には「壹万拾壹石七斗壹升下川又左衛門」とある。（以上下川元宣の説明は、藤原秀之「加藤清正朝鮮陣書状について」〈『早稲田大学図書館紀要四五号』一九九八年〉を参照した）

【加藤喜左衛門尉】加藤清之。加藤清正の一族で重臣。

《解説》

肥後国（熊本県）の大名加藤清正が、下川又左衛門尉元宣・加藤喜左衛門尉清之に対し、船に積む米（八木）・小麦・小豆の量について指示した文書である。豊臣秀吉の朝鮮出兵に関する史料とみられる。加藤喜左衛門・下川又左衛門・中川重臨斎の三人は、加藤清正の朝鮮在陣中には熊本留守居役として領国管理に当たっていたようで、国元からの物資調達と朝鮮の清正軍への後方支援を行っていた文書が多数残されている。この文書は年末詳だが、下川家文書の全体像について研究した青木裕美氏によれば、天正一七年（一五八九）の可能性が指摘されている（青木裕美「下川家文書とその伝来について」楢取素彦と加藤清正関係文書を中心に」『群馬県立歴史博物館紀要』第四〇号、二〇一九年）。

豊臣秀吉が天正一十九年（一五九二）明への出兵準備を本格的に始めると、加藤清正も渡海準備を進めている。一方、秀吉の前線基地である名護屋城普請を命じられると、国元に対して普請に必要な物資の調達を指示する書状を発している。文禄元年（一五九二）二番手として鍋島・相良氏とともに一万人を出兵し（文禄の役）、七月には朝鮮の二王子を会寧（かいねい）で捕らえ、さらに元良哈（オランカ、現口シア領）にまで兵を進めた。慶長二年（一五九七）再び朝鮮への出兵命令が出されると（慶長の役）、清正は再度一万人を率いて渡海したが、蔚山（うるさん）城にて苦戦し、九死に一生を得て帰国した。

寛永九年（一六三二）加藤家改易（かいえき）後、下川又左衛門の孫元知は慶安元年（一六四八）松平直矩（なおのり）の家臣となり、その後代々松平大和守家に仕えた。また、文書所蔵者の栗間家も松平大和守家臣の子孫で、加藤清正文書四点等は下川家から譲られたと伝わっている。